

(17)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

子どもの頃、過ごした小さな町がある。ほぼ生まれた時から高校卒業までの18年間で過ごした町だ。だが、両親はすでに都会に移り住んで20年くらいたち、私自身、高校を卒業して以降、長崎、東京、アフリカ、京都、アメリカ、ハイチ、東京、長崎と住む場所を変えてきた。地方の公共交通機関が日々過疎になっていき、訪ねていくだけでも、乗り継ぎを含めれば長い時間がかかるようになり、長い間、訪れても祖父母の墓参だけの駆け足の帰郷となっていた。

1964年生まれで、小学校、中学校と最盛期は過ぎていたとはいえ、たくさんの子どもがいて、当時はにぎやかな運動会があり、お祭りがあった。スポーツといえは少



やまもと たろう  
山本 太郎

を素手のこぶしで打ち、素手で捕り、走った。ルールは野球と一緒にだったが、走っている間に、ボールが当たってもアウトというルールがあった。1軒だけの本屋、パン屋があった。焼きたてのアンパンの甘い香りは今も覚えている。そんな町を初冬の週末、帰省を利用して訪れ、半日かけて歩いてみた。懐かしい街並みが広がっていたが、個別にみれば、駅前から

た。本屋や製パン屋、銀行の支店は廃業し、スーパーの棚にはまばらに商品が置かれているだけだった。

町を一望したくて、近くの山に登った。子どもの頃、何回か登った山だった。山頂に上がると、遠く四国の山並みの手前に瀬戸の島々が見え、その手前に海岸にへばりつくような町があった。山頂で一休みしていると地元の人らしき人から「どこから来たんですか?」と聞かれた。懐かしい土地の言葉だった。思わず「九州から」と答えた。それが、そこを出て30年という時間だったのだろうか。それとも「30年前からです」とも答えるべきだったのだろうか。

(長崎大学熱帯医学研究所教授)

30年

年野球で、少年野球に参加できない小学校低学年の子どもたちは、原っぱや校庭の片隅で、三角野球をしていた。軟式のテニスボール

延びる100坪ほどの商店街は、多分にもれずシャッターが閉じられ、人通りもほとんどなく、時に、車だけが通りすぎる町になっ